
お隣さん

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お隣さん

【Nコード】

N2645T

【作者名】

月乃宮

【あらすじ】

紗枝せえと、紗枝のアパートのお隣さんとの関係は、『おすそわけ』から始まった。美味しいものは、ふたりで分ければなお美味しい？

episode 1 . 「クリスマスケーキ、いかがですか」

「クリスマスケーキ、いかがですか」

ほら、おどろいてる。だから持ってきたくなかったんだよ……しかもホールの半分持つてきちゃった。おすそわけにしたって、ちよっと多すぎやしない？

「えーと、君は……たしか隣の綾瀬あやせさん？」

「はいっ、綾瀬です」

「それで、これは……ケーキ？ オレに？」

「そうです……あの、友達からもらっちゃって。私ひとり暮らしなもんですから、多すぎちゃって……」

どんだん口の中がカラカラになって、説明もなんだかしどろもどろだ。顔も熱くなってきた気がする。やっぱり迷惑だったかな……そう後悔し始めたとき。

「ありがとうございます」

「え……あ、はいっ、どうぞー!」

私が抱えていたケーキのお皿に、両手をのばしてきたお隣さん
河野さんは、ちよっとだけ口元に微笑らしきものを浮かべた。

「メリークリスマス」

私こと綾瀬紗枝あやせ さえは、今日の日付と同じ24歳になる。ここからドアトドアで一時間弱の某食品メーカーに勤めている平凡でちよつと貧乏な会社員だ。

今夜はクリスマスイブだからと、月末近いのに残業なしで上がらせてもらった。でも、なんの予定もないんだけどね。でも同僚の水沢さんは違った。

「ほんつと、ゴメン綾瀬ちゃん！」

「いいよー、そんなあやまらなくても」

「でもイブは女ふたりでホールケーキ完食するって、先月から約束してたのに裏切っちゃって」

「大げさだなあ！」

私は思わず苦笑をもらす。水沢さんに彼氏ができたのは今月の頭で、なんでも大学時代の先輩だそうだ。正直イブの夜がひとりつきりになるのは残念だけど、水沢さんに彼氏ができて本当によかったと心から思っている。「彼氏が欲しいよー」っていうのは、出会ったころからの水沢さんの口癖だったから。

そんなわけで、社員割引で注文しておいたホールケーキは私ひとりに託されたのだ。

「うー、寒っ……」

イブの夜、自宅アパートから徒歩五分のコンビニへ向かった。ケーキ眺めていたら、なんだか急にしょっぱい物が食べたくなったの

だ。

昼間はけっこう温かいのに、夜になるとさすがに冷え込む……マ
フラァー巻いてくればよかったかな。私はコンビニの店内へ小走りに
かけこんだ。

お菓子の棚からポテチを物色することしばし、選んだ袋を手に顔
を上げると、視界のはしっこに先ほど見た姿が……お隣さんだ。

向こうも私に気がついた。目が合って、ちょっと会釈をされる。

「先ほどは、どうも」

「いえっ、こちらこそ助かりました。なんか押し付けちゃったみた
いではないです」

ジーンズにブルゾン姿。あらためて近くで見ると、背が高いんだ
な。

「いや、知り合いにケーキ好きな子がいて……」

着信音に、言いかけた言葉を切って「失礼」と手に握られたケー
タイを開く。

「もしもし……あ、さよこ？　なんだ、もう着いたのか」

なぜか私は緊張した。ケーキ好きな子、かな……彼女かもしれな
い。

イブの夜だから、あたりまえか。水沢さんだって彼氏優先だもの。
そう思った自分の考えに、胸がチクリと痛む。

もしかして私、けっこうシヨックだったんじゃない？　水沢さん
のこと、イブのこと……。

「じゃあ、ちょっと急いで戻らなくちゃならないので」
「あ、はいっ……」

そう言って通話を切ると、お隣さんは足早にコンビニを出て行ってしまった。その後ろ姿を見送って、ふと我に返ったら、ずっと両手でポテチの袋をギュツとにぎりめていたことに気がついた。

なんだか自分で自分を笑ってしまった。

自宅に戻ると、ケータイにメールが入った。水沢さんからだ。

『今日はホントごめんね！　ところでケーキおすそわけできた？』
お隣さんにケーキをおすそわけするアイデアは水沢さんのものだ。私がイブに予定無いの知ってたし、ホールのケーキを持てあますだろうと心配してくれたのだ。

『大丈夫、おすそわけできたよ。彼氏と初イブの夜を楽しんでね』
返信してケータイをとじると、ため息をついてしまった。おすそわけできたっちゃできたけど、迷惑だったかもなあ。彼女来るんなら、きつと別にケーキ用意してあっただろうし、だいたい私が渡したケーキって工場で作った大量生産のヤツだし……考えれば考えるほど、やめとけばよかったと後悔してしまう。

そんな感じでうじうじ悩んで？いたら、玄関のドアの向こうから
声が聞こえてきた。

「じゃ、ケーキありがとな」

待って、男の声じゃないコレ！？

「いや、わざわざ来てもらって悪かったな」

こっちはお隣さんの声だ。え、ええ！？ もしかして『さよこ』
さんって、男の人？ しかもイブの夜にケーキ食べにきたってこと
は……まさか、ゲイカップル？

私は以前ネットでこっそり読んだBL小説を思い出し、ひとり赤
面した。すると今度は小さな女の子の声が聞こえてきた。

「りょーいちくん、ありがとう」

「どういたしまして。ケーキ食べすぎでまた腹こわすなよ、さよこ」

わあっ、カン違いだった！ 私はますます赤面してしまう。

それにしても、そっか……お隣さんって『りょーいちくん』って
言うんだ。私より少しばかり年上の男の人なのに、下の名前で『く
ん』づけだと、なんか男の子っぽくて可笑しい。

クスクス笑っていたら、インターフォンが鳴った。

「はい？」

「隣の河野ですが」

えっ、お隣さん？ しかも『ここの』?? 『かわの』って読む

んじやなかったんだ……よかった、さつき名前呼ばなくて。

玄関のドアを開けると、先刻と同じブルゾン姿の『ごうの』さんが立っていた。

「さつきは話の途中で失礼しました」

「あ、いいえっ、そんな別に……」

「友人の子がケーキ好きで、今うちへ取りに来たんです。よろこんで持って帰りました」

わざわざそれを言うために？ 私はちょっとうれしくなった。

「じゃあ、河野さんのぶんがなくなっちゃいましたね」

「まあ、そうですね」

「よかつたら、私のを半分いかがですか」

つい、口から出てしまった言葉に、言った本人である私がびっくりした。

「あ、その、実は……まだひとりには多すぎて」

全部食べきれないんです、と言いかけた言葉に、河野さんが笑った。

「じゃあ、手伝いますよ」

「あ、はいっ……」

「もしよかつたら、一緒に食べませんか」

こんなわけでイブの夜、私はひとりつきりじゃなくなった……。

episode 2 . 「かぼちゃ、いかがですか」

クリスマスも過ぎ、仕事納めまであと二日……という日曜日の朝。宅配便が送られてきた。

「……………かぼちゃ？」

実家の母親から野菜が送られてきた。無農薬や有機農法にこだわっているので、時折こうして取りよせた野菜を送ってくれるのだ。さっそく届いた報告の電話をかけた。

「年末は家に帰るよ？」

『知ってるわよ。でも野菜なんて重くて持って帰れないでしょ。だから先に送っておいたのよ』

実家はここから電車乗りついで二時間半ほど。たいして遠くないが、電車で移動するから確かに野菜持って歩くには不便か。だいたいで段ボール一箱だしなあ。

『多かつたら、悪くなる前に誰かにおすそわけしなさいよ』
「はい」

電話を切って、ふと『おすそわけ』の言葉にイブの夜を思い出した。

ケーキの『おすそわけ』した、お隣の河野さん。

「でも、これはなあ……………」

ひとり暮らしっぽい男性に、生の野菜をおすそわけしてもいいだ

るうか。最近は料理する男性も増えてきてるってきくけど、でもなあ……。

その日の夜、かぼちゃの煮物を作った。丸ごと一個煮たので、かなりの量ができてしまった……。

かぼちゃは足が早いって言うし、そのまま冷蔵庫に入れておくのは危険だろうか？

冷凍にしてもいいが、年末年始は実家に帰ってしまうから、だいぶ長いこと入れておくことになる。悪くはならないだろうけど、年越しで置いとくってという考えになんとなく抵抗感がぬぐえない。

こうなったら、おすそわけするしかない。

小鉢に入れたかぼちゃの煮つけにラップをかけ、玄関を開けたその時。

「こんにちは」

「あ、こんにちは……」

河野さんに、はち合わせてしまった。

この前見たブルゾン姿で、今まさに外から帰宅したばかりか、という様子である。河野さんの視線が、私の手にした小鉢に落ちた。

「あ、これ……」

反射的に両手を伸ばした。

「オレに、ですか？」

「ええ、はい、そうなんです。実家の母がたくさん野菜送ってくれたんで……」

「食べきれない？」

私の言いかけた言葉を、河野さんが言った。

私はびっくりして口を開けたまま固まっていると、河野さんはクスリと笑った。

「じゃあ、遠慮なくいただきます」

「あ、はい」

「ありがとう」

「いえいえ」

会釈して、部屋へと引き返す。玄関の扉を閉めたら、ほっとしたと同時に緊張していた気持ちがゆるむ。キッチンに戻って、ちよつとお茶でも入れようかなと思っていた矢先、今度はインターフォンが鳴った。

『河野です』

もしかして小鉢を返しにきてくれたのかな、と思って扉を開くと、そこには大きな花束が。

「『おすそわけ』です」

ニツ、といたずらっぽく笑った河野さんに、私は「ええっ」としか声が出ない。

「いただきものなんだけど、うち花瓶が無くてね。コップに入れるのも限界あるし、よかつたらもらってくれませんか」

「いいんですか？　こんなすごい花束」

豪華な色とりどりの薔薇が、ざっとひと抱えあるよ！？　なんか特別な記念にもらった物じゃないのコレ……　本当にもらっちゃっていいのかなあ？

「花瓶が無いなら、うちのお貸ししますよ？」

「遠慮しないでください。隣で元気に咲いてくれてるなら、それで十分」

「でも……　綺麗なのに見れないなんて、なんだかもったいないですよ……」

大きな薔薇の花束をはさんで、私達の間に一瞬沈黙が落ちる。やがて河野さんが、何か思いついたように顔を上げた。

「……じゃあ、窓辺に飾ってください。そうしたら外から見上げます」

河野さんの静かな微笑みに、私はドキリとする。あのイブの夜、うちに招いてケーキと一緒に食べた時も同じように笑ってたっけ。

「わかりました、必ず見上げてくださいね」

私は上機嫌で薔薇を受け取り、玄関の扉を閉めた。たしかうちに大きめの花瓶があったはず……　洗面所のシンクの下を探したら、ちょうどサイズがあいそうな花瓶が出てきた。

水切りしながら『やっぱこういう手間が、男の人は面倒なのかな』としみじみ思う。女の私だって、この量の薔薇（三十本ぐらいある）を一本ずつ水切りしていくのは、ちょっと大変に思うからなあ。ち

なみに薔薇の水切りは、はさみ使わずに手でやったほうがいい。

冷水ですっかり冷え切った両手で、花瓶の薔薇をひとまずダイニングに運んだ。テーブルに置いてみたら、びっくりするくらい迫力がある。思わず写メ撮ってしまった。

これは大きめな台が必要だな。

今度は寝室へ行き、ベッドのサイドテーブルを窓辺に移動させた。その上に薔薇を飾ってみたらぴったりだった。

寝室にはベランダがなく、通りに面しているので、アパートの外から窓を見上げることができる。外から見たら、どんな風に見えるかな……明日の朝、出勤するとき見てみよう。

あれ、なんだか自分が楽しみにしてる。河野さんのために、窓辺に飾ったのに。

翌日、仕事帰りに突然雨が降り出した。いつも鞆に入ればなしになっている折りたたみ傘をさして駅からの道を歩いていたら、スツと小走りに通り過ぎる影があった……あのブルゾン姿は。

「河野さん！」

私が大声で呼び止めると、数メートル先の河野さんが足を止めてふり返った。私は急いでかけよると、「どうぞ」と折りたたみ傘を半分さしだす。

「すみません。でも、もう結構濡れちゃってるんで
「え」

たしかに、河野さんはずいぶん濡れてた。

「ホントですね……でもずぶ濡れってほどじゃないですよ」
「まあ、そうかな。コレ、オレが持てばいいの？」
「あっ、お願いします」

結果、背の高い河野さんが傘を持つことになった。

「今日は傘を『おすそわけ』ですか」
「あはは」

「なんかオレ、綾瀬さんにもらいつぱなしですね」
「何言ってるんですか、私こそあんなすごい薔薇もらっちゃって…
…あ、そうだ。窓辺に飾りましたよ。ほらあそこ」

って、雨で窓ガラスが濡れちゃってて見えないじゃん！

「あー……ちょっと見えませんね」
「待って、そういうえば昨日写メ撮ったやつが」

私がケータイを取り出すと、どれどれ、と河野さんが身を乗り出した。傘の中、二人でケータイをのぞきこむ。

「ね？」

「ホントだ」

ふと、隣から感じる吐息に、私は我にかえた。

近っ……この位置、顔が近すぎだっば！

「ん？」

「あ」

思わず顔をじっと見てしまった。そこで初めて、河野さんがさわやか系なイケメンだということに気づいてしまったよ。

「どうしたの？」

「いや、えーと……こんなところでケータイ開いてる場合じゃないですよ。あはは……早く帰りましょう」

お隣さん、イケメンであること判明。

私、気づくの遅すぎ。

episode 3 ・ 「チョコレートいかがですか」

重い紙袋が肩にくる……もう何度持つ手を変えただろう。

あと少しで帰れる……あと少し。

それは同時に、あと少しで決断しなくちゃならない、ということでもあった。何をって、この中身をお隣に「おすそわけ」するかどうかだ。

鉛のような紙袋の中身の正体はチョコレート。

課長の戦利品をまるまる引き受けてしまった……なにしろ今日はバレンタインなのだから。

「綾瀬さんぐらいしか頼める人いなくてね。他の課からは誰かしらくれてるし、義理とはいえ本人の耳に入ったりしたら悪いし」

三十代半ばの、ダンディだけど最近虫歯が見つかったので歯医者通いしている課長は、ニッコリと有無を言わせぬ微笑みとともに大量のチョコレートを私に押しつけたのだ。

たしかにうちの課は、私が入社当時から『義理チョコ禁止』が暗黙の了解で、だから誰も課長にあげようとしなかった……本気チョコはあったかもしれないけど。（なにしろ課長はダンディな独身貴族だから）

とにかくそんなわけで、なぜか女の私がイベント当日にたくさんチョコレートを受け取るはめになってしまったのだ。

こんなにたくさん、困るよ……。

女性はチョコレート好きだなんて、盲目的に信じている男性陣はたくさんいるだろう……好きと同じくらい、ダイエットの敵だということ分かってるんだろうか。

もちろん、チョコレートは嫌いじゃないよ。だから困る。

だから「おすそわけ」したい。

でも、でも……！

男の人に、バレンタインの当日にチョコレートのおすそわけって、ちよつと微妙すぎない！？

まあ、そんなことを考えているうちに自宅に到着してしまった。お隣さんはもう帰宅しているみたい……さつき外から灯りが見えた。

私はコーヒーターブルにあごをのせ、目の前の箱をじっとにらんでいた。駅前の某チェーン洋菓子店で購入したチョコレート、500円ナリ。ピンクの包装紙にチョコレートブラウンのリボン、それに金色の文字で『St. Valentine Day』と流れるような字体で書かれている。

いわゆる「可もなく不可もない」チョコレート。主に義理チョコ用に使われそう。

これをお隣さんに渡そう、なんてどうして思ったのか。

だってこんな日にただ「おすそわけ」だけ渡すのって、しかもチョコレートなんてなんか……失礼かなあって。

そりゃ河野さんは爽やか系なイケメンさんだからチョコレートの一つや二つ、もらってるだろうけど、だからって「おすそわけ」でチョコ渡すなんて……と、そこでハッと気がついた。

そうだよ、一つ二つどころか、紙袋いっぱいもらっていたらどーすんの!?

向こうだって紙袋ひとつ、いやふたつぐらいのチョコレートをどうしたらいいのか困っているかもしれない。「おすそわけ」だけは失礼だとか、義理チョコも渡そうかとか、そんな問題じゃなかった。

仕方ない、これは今度実家へ帰るときにでも持っていこう。

電車で二時間とそれほど遠くない実家だが、このチョコレートの袋を抱えて帰るには遠い……会社の同僚には、もしかしたら課長にあげてる人がいるかもしれないから分けられない。となると、短大時代の友達か、あるいは高校時代の友達……?

その前に、この目の前のチョコレートをどうしてくれよう。

「自分で食べちゃおっかな……」

声に出して言うてみると決心がついた。

リボンを解き、ふたを開けると、赤い銀紙に包まれたハート型のチョコレートが顔をのぞかせた。ひとつ食べてみたら、やはり可もなく不可もない……。

と、そこでインターフォンが鳴った。

『夜分すいません、河野ですけど』

私はなぜか大あわてでチョコレートを隠すと、口の中のチョコもいそいで咀嚼そしゃくして玄関へ向かった。

「こんばんは、寒いですね」

「あ、どうぞ中へ……」

「あ、いやいや、ここで大丈夫です」

河野さんは長袖Tシャツ一枚でちよつと、いやかなり寒そうだ。いや、そんなことより……その手にしている紙袋の中身はまさか。

「チョコレートお好きですか。よかったらもらってくれませんか…

…一人にはちよつと多すぎて」

「あ、でもそれバレンタインのじゃ……」

「あ、すべて義理ですので大丈夫です」

その言葉に、私は少し引っかった。

「もしかしたら、義理じゃないものも混ぜられているかもしれません

よ」

「……」

「あの、とりあえず中へどうぞ……」

結局うちにあがった河野さんに、私はコーヒーなぞすすめてみることにした。

私たちは向き合って床に座っていた。二人の間にはチョコレート
の山。

「……これは完全に義理。こっちとこっちはたぶん本気」

「これは？ 連名になっているから義理かな」

「うーん、難しいところですね……義理にしては高級だし。憧れ、
かな？」

河野さんはクスクス笑った。笑うとちょっとカワイイ。いや、そ
れは置いといて！

「綾瀬さん、すごく詳しいね。やっぱり女の子の気持ちは女の子に
聞くのが一番なんだな」

「いや、詳しいというか……そりゃ女の子？ですから……」

なんかやたら恥ずかしいな。『どれが義理じゃないか分かる？』
と言われ、つい真剣に吟味してしまった……そろそろ切り上げよう
かな、と思っていたら、河野さんの次の言葉に凍りついた。

「こっちは？ あれ、箱が開いてる……」

私のチョコがいつの間にも！

それはソファアの足元に隠しておいたヤツ！ だめ、それは見な
いで！？

「それ、それは私の義理チョコですっ！」

私の突然の大声に、河野さんは一瞬ビクツとした。「あ、そうなんだ」とあいまいな言葉をつぶやいて、それでもまだ箱を手にしたままだ……つい正直に「義理チョコ」って言っちゃったけど、もしかしたら河野さんへの、ってカン違い（でもないけど。もとはと言えばあげるつもりで買ったんだし）されている！？

「それは、自分用です。自分で食べるために買ったんです……今日の帰り」

「……」

「で、でも」

なんだ、勝手に口が回る……。

「よかつたら、一緒に食べてくれませんか？ 一人じゃちょっと食べきれなくて……」

河野さんが笑いをかみこらしてる。

ああ……なんというか、不様だ、私。

「コーヒー入れなおしてきます……」

トボトボとキッチンへ向かう私の背中に、河野さんの声がかかった。

「義理でもうれしいよ、ありがとう」

……義理じゃなかったら、うれしくなかったりして。ああ可愛げない、最高に可愛げない渡し方をしてしまった……でもそもそも義

理のつもりで買ったんだし、これでいいんだ。

いいんだけど、ちょっと残念のようないいんだ……？

それでも一緒に食べるチョコレートが私の買ったチョコレートだけ、というのが少しくすぐったい。『押し入れに隠してある課長からもらったチョコレートはやっぱり実家行きだな』……そんなこと考えながら、河野さんと最後の一粒を争って、最終的に半分こすることになった。

「じゃ、俺が先にかじっていい？」

「！？」

「なーんてウソ。綾瀬さんからどうぞ、あーん」

そんな恥ずかしい真似できるわけもない……私はラストのチョコレートをいさぎよく辞退したのだった。

episode 4 . 「送りましたか」

わわわ、遅刻、遅刻しちゃうよ！

玄関先で、家のカギ忘れたことに気がついた。

靴を履いたら、今度はお弁当を忘れた。

扉に手をかけたら、ハンカチ忘れた……携帯忘れた、いや、携帯はある……。

あわてる私は、けっこうそそっかしい。

たとえば今朝のように、ちよつと二度寝しちゃっていつもより十五分時間が足りないとなると……ボロボロと忘れ物をしまくる。玄関と部屋の間を何度往復したことが！

普段は『文化系ですね』な感じにポーとしてるのに、パニックに陥った私の活動的っぷりったら！自分がこんなに俊敏に動けるなんて忘れてたよ、ってやっぱり忘れっぽくなってるのか？

とにかく急がなくちゃ。

いつもの電車に間に合うかは微妙なところ。駅までダッシュで八分……いや七分つてところ？このヒールのかかと、絶対むける。底がボロボロになる……ああ。

ボタン、と派手にドアを開けた時、隣から知っている声が私の名を呼んだ。

「綾瀬さん！？大丈夫ですか」

「あ、河野さん、すいません、うるさくしちゃって……もう出かけ

ますから……うあつ!？」

鞆のヒモがドアノブに引っかかった! と、取れない……うわうわ、もうヤダなんなの!？」

「送りましょうか」

「は?」

「ホラ、早く」

チャリ、とキーホルダーを手に河野さんが廊下の先でふり返った。私はあわてて追いかけた。

「……バイク?」

「乗ったことないですか? でも大丈夫ですよ、ちゃんとつかまっていれば」

アパートに隣接する駐車場で、私は大きなバイクにまたがった河野さんにヘルメットを渡された。なにこれ、重い……首、大丈夫だろうか……?

でもぐずぐずしている暇もなく、私は河野さんにヘルメットをつけてもらって(アゴのベルトの締め方が分からなかったのだ)言われるままに後ろにまたがり、腰につかまらせてもらって、そしてアパートを出発した。

風冷たい……けど気持ちいい。

渋滞なんて、なんのそので走り抜ける河野さん……と後ろの私。気持ちまで突き抜けてしまいそう。さっきまで心配だった気持ちが吹き飛んでしまい、遅刻したって別にいいや、って本気で思い始めてた。

けつきよく最寄駅ではなく会社の近くまで乗せてもらった（会社の前だと、誰かに見られるかもしれないから）

「本当にすみませんでした、助かりました」

「いえいえ。朝イチで走ったりすることもよくあるから気にしないでください」

私は何度も頭を下げてお礼を言い、バイクの後ろ姿が見えなくなるまで見送った。なんだろう、河野さんってかつこいい……顔も爽やか系イケメンだけど、行動とか仕草とか言動とか。

どうしよう、河野さんイイ……！

なんて素敵なお隣さんだろう。私は運が良かった、本当に……と、朝の遅刻騒動から一転、ハッピーな朝のスタートとなった。

これが月九ドラマなら、河野さんに送ってもらったところを会社の同僚が見てて、それを冷やかされたりして意識し出して、そんなふうに物語が展開するのだろう。

でもこれは月九でもなければ、ベタに冷やかすようには同僚もいない。私の一日はハッピーに、しかし平凡に始まった。要するに誰も見てないし、私は朝の軽い妄想ストーリーに満足しただけでさっぱりとしたものだった。

仕事帰りに駅ビルのスーパーに立ち寄る。

いつものように夕食と、お弁当のおかずになりそうな食材を見繕いながら今朝のことをなんとなく思い出していた。

そしてふと『河野さんに何かお礼をしたほうがいいのだろうか？』という思いに至った。

だって出かけるついでに、じゃなくてわざわざ送ってくれたのだし、しかも最寄駅じゃなくて最寄り駅から四駅も離れた会社の近くまで送ってくれたのだし。

でもこうした場合のお礼って、なにがいいんだろう？

やっぱり無難に食べ物かな。普通におかずの『おすそわけ』とか……。

しかし何のおかずがいいだろう？ スタンダードで煮物？ でも男の人ってあまり煮物好きじゃないんじゃないかな……（うちは兄も弟も煮物は好きじゃない）

肉じゃがは、いかにも男受け狙ってるようで恥ずかしい。だいたい今回は男受け狙いがポイントじゃない、お礼がポイントなんだって。（それに肉じゃがって意外に男の人に人気ないんだって！）

男の人はカレーが好き……だけど好みが分かれる危険アイテムだろう。他所の家のカレーは食べたくない、という人も中にはいるらしい。

お菓子はダメだろう。甘い物がニガテな人なら迷惑だ。（うちの父がそうだ）

私は買い物カゴを手に途方に暮れてしまう……食べ物の屋気楼の中を旅しているかのよう。そしてゴールが見えない……。

その日私はあきらめて帰路についた。

けっきょく『おすそわけ』のアイテムは決まらぬまま、である……。

…。

episode 5 . 「いいから」

新人社員歓迎会が四月の頭に開かれた。

もちろん全員参加。私ももれなくお酒の席について、ウーロンハイなどいただきながら同僚と談笑していた。

いつも飲み会ばかりだと嫌になっちゃうけど、久しぶりだから楽しい。自然にお酒のピッチも早くなる。で、これまた久しぶりに泥酔してしまった……。

「泥酔してしまった」、じゃないでしょ私！ もう二十五でしょ私！！

「綾瀬ちゃん、やつちやった？」

「はー、もうダメれす……」

なさけない、ほんっと、なさけない。

誕生日を迎えてまだ十日も経っていないのに。今年の誓い（私は毎年誕生日にはコレをやっている）はなんだったつけ？ ああ、大人になるってやつね。

「大人になる」って漠然としすぎてたな……。

大人って何者なんだろう？ 私みたいなへボな大人はいつぱいいると思うけど（自分を正当化してるだけ？）これが大人の姿なのか？

お酒を飲めるってのは、少なくとも大人の証か……責任取れてないけど。

同僚の池波君に支えてもらって、ようやく駅前のタクシー乗り場にたどりついた。「家まで送りますよ」という親切な池波君の申し出を丁重に辞退して、私はタクシーの列に並んだ。

支えを失い、体の重心がなんだかクニヤクニヤする。あ、気持ち悪い……でも吐けない。吐いたらダメだ、吐いたら私は社会的にダメになる。そんな風に自分を叱咤しつつ、必死に両足で踏ん張った。

踏ん張ったけど、やっぱりダメだった。

私は列から外れるとバスターミナルの端へ移動し、植え込みを囲うブロックの縁に座りこんだ。あ、寒気までしてきた……めまいも半端ない。お父さん、お母さん、すいません。ごめんなさい、もう無茶しません、だから神様どうかこの吐き気を止めて。どうかお願いします仏様……。

「綾瀬さん！？ 大丈夫！？」

あ、なんかデジャブ。

「気分が悪いの！？ あ、もしかして……」

のそり、と顔を上げると、目の前に河野さん。私のお隣さん。

「ごめんなさい……」

「どうしてあやまるの？」

「飲みすぎました……」

「うん」

「吐き気、する」

「すぐは動かないほうがいい。今飲み物買ってくるからじっとして

て」

しばらく後、河野さんは水のペットボトルを渡してくれた。

「はー……冷たくてきもちーれす」

「それ飲める？ 少し飲んで、アルコールを希釈した方がいいよ」

「ふた、開きません」

ふたを開けてもらった。

「はー、おいしいれす」

「よかった……少し休んで、動けそうなら言って。送るから」

河野さんは私の隣に腰を下ろした。

河野さんは、私の隣だ。

「ふ、ふふふ……河野さん、お隣さんれすね」

「うん」

「はー、いいお隣さんでよかった」

お隣さんが小さな笑い声をたてた。

「れもですね、まだお返しができてないんれす。ごめんなさい」

「お返し？」

「ええ、お返しです。こないだの。バイクで送ってもらったれしよ。

アれれすよ」

「お返しなんて、気を使わなくていいから」

「考えたんれすよ、これれも。煮物はー、いまいち、カレーはー、好き嫌い、肉じゃがはー、ウケねらい」

「ウケねらい？」

「はい、女の子の必殺技ねす、肉じゃが攻撃、どうだー！って」

なんだかおかしくて、笑ってしまった。隣の河野さんも笑っている。肩がぶつかって、そこが温かい。吐き気するのに、気持ちいい変なの。

「煮物だって、カレーだって、肉じゃがだって、なんでも好きだよ。綾瀬さんが作ってくれるなら」

「ホントねすかー」

「ホントですよー」

「じゃあ、肉じゃが作ります……あーよかった、やっと決まった……」

「決まったところで、そろそろ歩けそう？」

それからいつの間にかタクシーに乗せられ、私は自宅アパートへ戻った。玄関先で「鍵は？」と言われて差し出すと、ドアを開けてくれた。

河野さんの手を借りて、私はベッドにたどりついた。布団をかけてくれて、それから髪まですいてくれた。

いいお隣さんで、よかったなあ。

「絶対、肉じゃが作りますね……」

「いいから」

「いーえ、約束れすよー」

「だから」

ふと、河野さんの言葉が途切れた。額に柔らかいぬくもり。

「ちそうさま」

「……」

やがて意識が途切れ……。

朝を迎えた。

あ、あ、あれは——！？ いったいなんだっただの！？

目が覚めて、まず私は額を撫でた。撫でながらパニックを起こした……昔からお酒飲んで酔っ払おうが、絶対に記憶は無くならない。

肉じゃが作る約束しちゃったよ（しかも一方的に）いや、あれは約束してないことになるのか？ だってき、き、きすがおでこに、ごちそうさまって……。

私は頭を抱えた。ちなみに頭痛はしなかった。

episode 6 . 「味噌汁もいかがですか」

先日お隣さんにいろいろお世話になって……微妙な部分もあったけど……お礼に肉じゃが作ることにした。

肉じゃがを作るのは久しぶりだから、まずは練習がてら一度作ってみた。

結果はまずまずで、その夜は白いご飯と一緒においしくいただいた。たつぷり鍋一杯作ったので、翌日のお昼に食べようとお弁当箱に詰めているときふと思った。

待てよ、これは本当に他の人が食べても美味しいのかな……。

私の作る料理のほとんどは母が教えてくれた。母はプロの料理人でもなんでもない、ごくフツウの専業主婦である。

もちろんプロの味を出したいわけじゃない。だけど家庭の味って、その家庭で育ったから美味しく感じる味なんじゃないか？ 小学生のころ、お友達の家で夕飯ごちそうになったとき、たいして美味しく感じなかったことを思い出す。

「あれ、今日はお弁当？」

会社の昼休み、デスクでお弁当の包みを広げていたら池波君が声をかけてきた。

「なんだー、久しぶりの内勤だったから、水沢っちと一緒に外で食べようと思ったんだけどな」

「あー、ごめん」

「そういえば、こないだの帰り大丈夫だった？」

営業で外回りが多い池波君とは、私が泥酔したあの夜以来だ。

「あー、迷惑かけてごめんね。ちゃんと無事タクシー乗れたよ」

「それは分かってるんだけどね、ほら……彼氏迎えにきてたじゃん？　ただ次の日金曜だったから具合どうだったかなーって思ってさ」

池波君は『彼氏うんぬん』という部分だけ、わざわざ声を低くしてくれた。

くれたのはいいんだけど……誤解だ。

「実は俺、やっぱりタクシー乗るまで見てた方がいいかなって、あのあと引き返したんだ。あんのがよう座りこんで伏せてたみたいだけど、隣の彼氏に介抱されてたみたいだったし」

「あのね、あの人はね」

「自販機の前で声かけたんだよ、そうしたら彼氏に『少し休ませたら連れて帰りますから』って言われたんだ」

「うわあ……どこ訂正したらいいかわかんない。全部ホントのことみたいだし。」

とにかく一か所だけは正しておかないと。

「あのね、あの人は彼氏じゃなくなっちゃって友達」

「まあまあ、あわてんなよ。別に会社で公言しないからさ」

「だめだ、こりゃ……」。

「おつかれー」

「おお水沢。これから昼飯どう？」

「いいよ。綾瀬ちゃんは……あ、お弁当？ 食堂なら一緒にできるけど」

私は両手ゼスチャー交えて「二人で外行つてきなよ」と言つと、水沢さんは私の開けかけたお弁当のふたをつまんでヒョイと持ち上げた。

「おお、肉じゃが」

「うん、昨日鍋一杯作ったからその残り」

「そっかー」

二人が出かけてしまつてから、私はひとり自分のお弁当と向き合つた。

そういえば二人に試食してもらえばよかったかな……でもそんなこと頼んだら「どうして」って突っ込まれそう。そうならうまく説明できる自信ない。

インターネットでレシピ探してみようか。

料理サイトに肉じゃがレシピはたくさん出てるので、そのうち二つほどピックアップしてみる。ついでにプロの料理人のレシピも見つけた。

そして週末。

私はさつそく三つのレシピを試してみることにした。

それぞれの味をきちんと確認するため、調味料まで測りを使って分量きっちり入れた。

なるほど、三種類とも……うちのバージョンを含めて四種類にな

るか……味の違いがはつきり出た。でもどれもおいしい。ということとは、うちの作っても大丈夫ということかな？

他が変わったレシピないかなー、とさらにネットで検索していたら、たまたま見かけたサイトで『男子は肉じゃがよりも味噌汁の方を好みます』なんてのを目にした。

味噌汁だー？ さらに味のバリエーションあるんじゃ……。

一瞬『肉じゃがに添えてもいいな』って思ったけど、味噌汁って具ひとつとっても種類がいろいろあるよ。どれが好みかなんて、さらに分からない……。

まあでも肉じゃがって約束だし、こっちは保険？がてらに作ればいいか。

かえって種類が多いから、すつきり『うちの作り方でいいや』って思えた。食卓に並ばせるとなると、肉じゃがと、味噌汁と、ご飯って感じになるのかな。

野菜が足りないから、ハウレンソウの味噌汁にしよう。

ハウレンソウの味噌汁は、私の好きな味噌汁だから作り慣れている。さあこれで準備万端だ。

肉じゃがの器を持って現れた私を、河野さんは驚きつつも嬉しそうに迎えてくれた。

「あ、ちょっと扉おさえててください」
「は？」

玄関先で私は「そのまま」と両手で合図すると、いそいで自分の部屋へ戻った。台所から慎重に鍋を持ち上げると、ハウレンソウのタッパーを小脇に抱えて再び河野さんのもとへ。

「お味噌汁です。これもどうぞ！」
「ええっ!?!」

河野さんはとまどうように笑った。

「大丈夫ですよ、うち鍋もうひとつあるんです。だからしばらく使ってくださいってもかまいません」

「ああ……」
「それからハウレンソウは茹でておきました。食べるときにはっつを入れて」

「一緒にどうぞですか」

顔をあげると、どこか困ったような苦笑気味の河野さん。

「どうぞ……狭いところですが」
「うちと同じですよー」

私は笑いながら鍋ごと中に入ると、自分のうちと同じレイアウトなのにまったく異空間にいる感じがした。

「キッチンはこちら、って分かってるか」

河野さんはクスクス笑いながらリビングへ続く扉を開けてくれた。あー、こんなことならハウレンソウ生で持ってくるんだった。沸騰寸前のところにふわっと入れて火を通すとおいしいんだよね。

「河野さん、自炊派ですか」

「え、なんで？」

「キッチン見るとわかります。使い込まれてるって感じ」

どんな料理を作るのかな。一度食べてみたい……って言ったら、肉じゃがの交換条件みたいになっちゃって今言うのはよくないか。

「今度はオレが作りますね。綾瀬さん、何が好き？」

「えー」

心読まれた！ 私はお味噌汁をよそいながら、内心うれしくせに「困ったなあ」な感じでそわそわしてた。何がいいかな、うーん男の手料理かあ。

「河野さんの大好物がいいです」

「オレ？」

「はい、大好物ならたくさん作ってるだろうから美味しいはず……いえ河野さんが作ってくれるならきつとなんでも美味しいと……」

ふと、手を取られた。いや、おたまを取られた。

「カワイイ」

「は？」

「ありがとう、綾瀬さん……」

そのまま額にき、きす、された。
ぶわあと顔が熱くなる。

「あのっ」

「ん？」

手は（おたまは）にぎられたまま……ま、まさか河野さんって。

「ハーフ、とか」

「は？」

「クウオーターぐらいですか？ 日本人顔ですよね？」

そのまま河野さんは体を二つに折る勢いで笑いだした。すっごいウケてる……。

いやいやお礼できすとか、もう外国人のノリでしょ？

「ホント、綾瀬さんはもう」

「あ、なんか失礼だったかも…… すいません」

「ちがくて」

ふわり、と頬にきす。くすぐりたい。

至近距離でじっと見つめられて、私は思わずへらり、と笑っていた。

「お味噌汁、冷めますよ」

「そうだね……じゃあいただきます」

……断っておくけど、さすがの私もそこまで鈍くない。

episode 7 . 「白いたい焼き、いかがですか」

いつたい河野さんは、私のどこが好きなのだろう。

先週末、河野さんちで額と頬にきす、されたとき。

さすがの私も気づくに至った……ああ、このひと私に好意を持っている。どうしてだか知らないけど、と。

私と河野さんの歴史(?)は浅い。

初顔合わせが四か月前のクリスマススイブ。それからまともに話したのが、片手で数えられるくらい。そのどれをふり返っても、これといって好印象を与えた記憶は無い。

やっぱりクウォーター説が濃いかなあ。

いやいやいや、あれは違う。断じて、違う。

あれは私に好意があるからやったことだ。じゃなきゃあんな風いきす、なんかするか。

きつと恋とはマジックなんだ。

どこが特にどうの、なんて無いんだ……ただなんとなく、好きになるんだ。

ああ、ひとりでぐるぐる考えて、だんだんわけ分からなくなってきた……そしてもうすぐ夜七時。

お隣さんを訪ねる約束の時間だ。

今日はお隣さんが、手作りの夕食をごちそうしてくれる日だ。

いわゆる『男の手料理』ってやつだ。

私はデザートを準備した。

さんざん迷って、駅前で購入した『白い焼き』だ。たい焼き！色気少なさ！でもそこがポイントなんだ。色気を出してはいかん……出したら間違っている気がする。

「こんばんはー」

「いらっしやい……さ、どうぞ」

河野さんはオサレな水色のエプロンをしていた。

男のエプロン姿！なかなかいいじゃないの……だめだ、惚れてしまいそうだ。このままでは負けてしまう……。

「パスタですか」

「うどん、ドリア」

ドリアが得意料理ですか……オサレじゃないですか。

「とはいっても、色んな食材を適当に放りこんで、チーズのせて焼くだけ。オレ、チーズとかこってりした味が好きだから」

「はー、そうなんですか」

「それからごめん、先に苦手な食べ物聞いておくの忘れてた。もし何か食べれないものがあつたら、遠慮なく残してくれて構わないから」

フォークを差しこみ、引っ張りあげるとチーズの糸がトロリと伸びた。

「あ、あふっ……ねも、おいひいれす」

「ふふふ」

向かいに座る河野さんは、楽しそうに笑いだした。

「この前と同じじゃべりかた」

「？」

「ほら、酔った夜の」

ああ、あれ……。

「その節は、すみませんでした……」

「あ、そういうつもりじゃなくて」

そしてフツ、とやさしげな微笑。

だめだ、目を合わせたら石化するっ……！！

「あの」

「ん？」

「河野さんって……」

私のこと、好きなんですか。

「うん」

いったい、私のどのへんが？

「うーん……なんとなく」

「なんとなく好きなんですか！？」

「は？」

あれ？

「いや、大学入った頃から自炊始めたから……かれこれ十年近くになるかな。凝り症で、つい料理本とかまで買っちゃってた。実家に戻ると、母や姉にコツを教えてもらったりするしね」

「……料理？」

「うん？ 綾瀬さんは？ 煮物とか上手だったし、けっこう色々作るんじゃない？」

そうですね……私も自炊歴は大学からです。

よかった、口に出さないで、ほんっとよかった……！

内心冷や汗ダラダラの私に、河野さんはデザートにお茶を添えて出してくれた。そう私の持ってきたデザート、あの白いたい焼き……。

「コレ食べるの初めてだな。よく駅前で見かけて、いつか食べてみたいと思ってたんだ」

「それはよかったです。私はたまに買って食べますよ」

「こっちはチョコ味？ 小倉はこれかな」

「これが小倉です。こっちはカスタード」

私はカスタードを手を取った。

「好きだな」

「ええ、私も……絶妙な味ですよ」

「そうじゃなくて、綾瀬さんのことが」

私は白いたい焼きをノドにつまらせた。

episode 8 . 「GWはどこへ行きたいですか」

「京都なんかいいですね」

のんきに答えた私は、このとき河野さんの表情が固まったことに首をかしげた。

「京都か……」

「駅弁とか買って、新幹線で食べるんですよ。いいなあ」

「駅弁……」

いつもの（そう、あれから恒例となった）夕食会で、私が腕をふるったのに焦がしてしまったハンバーグをあらかた食べ終わったところ。キッチンからお茶を運んできた私に、河野さんが「GWはどこへ行きたい？」とたずねてきたのだ。

「京都なら、日帰りは厳しいかな……」

「そりゃそうですよ、一日で帰ってきちゃうなんてもったいないです」

「ホテルと旅館は、どっちがいいの？」

「そーですねえ、旅館は風情あっていいけど、交通の便がいい近代的なホテルのほうが気が楽……」

そこで私は、なんだか違和感を覚えた。

「わかった、じゃああとは日程だね。オレは29日まで仕事が入ってるから、綾瀬さんの都合がつくなら30日からでも……」

「えっ、いったいなんの話ですか!？」

「京都旅行でしょ？」

なんで河野さんと旅行する話になってるの？

「初デートがいきなり旅行で、しかも泊りだけど……心の準備は大丈夫？」

河野さんのからかうような視線に、私の頭は沸騰した。

「わーわー、すみませんすみませんっ！ 私なんかカン違いしてましたー！！」

「えー？」

「てつきり、ごくごく一般的な質問というか、個人的な希望というか、そういうのを聞かれているのかと思いましたっ……あのデートとかそういうんじゃないかって」

「オレはそのつもりだったのになー」

大きくため息をつかれ、わざとらしくがっかりした態度を取る河野さん。すっごく子供っぽいんですが、そのスネかた……それでも、すっごくカワイイんですが！ なんですか、そのカッコかわいさは。

「それで、その、デートするんですか……」

「ん、ダメかな？」

「いや、そんなダメだなんて！」

デートの話って、こんな風にまとまるものだけ？

とにかくいきなり京都旅行はダメ。そんな、まだ普通のデートもしたことないのに！ だいたい私、河野さんに一方的に告白されただけで、まだお返事してないよ！？

「だって綾瀬さん、オレのことイヤじゃないでしょう」

クスクス笑って、それから今度は色っぽい視線をからませてくる。なんですかその色気ただ漏れな瞳は。こんなふうに二人きりで、いたい私はどういリアクション取ればいいっていうんですか。

すると自然に引き寄せられ、あれよあれよといううちに唇が重なった。

うわっ、河野さんにきす、された……今度はホンモノのきすだ。

「……目、閉じて」

「あ、はいっ！」

「素直だね」

そう言っつて、もう一度しつとりと重ねられた。

ああ、なんだか流されてるよ私……まだちゃんとお返事してないのに……してないのに！

そしてとうとう初デートの日を迎えた。

行き先は無難な映画館だ……私の提案だ。正直どこへ行けばいいのか全然分からなかったから、一番無難なデート先にしてみたものの、今度はどの映画を観ればいいのか全然分からない。

仕方がないので、一番無難なハリウッド最新作にしてみた。そこそこ面白かった。

「綾瀬さんは、どっという映画が好きなの？」

「えっ、好きな映画？」

「映画に誘われたから、てっきり映画好きなのかと思ったんだけど……違う？」

映画に誘われた？ 私が誘ったことになってるの！？

ちょっと待っててくださいよ河野先生、あなたが「GWはどこへ行きたい？」っておっしゃったから、京都旅行やめて映画館にしたんでしょが。

「普段は映画なんて、ほとんど観ません」

「そっか、じゃあデートだから観たんだ」

「ま、まあ、そういうことになりますね……」

「よかった。綾瀬さんが観たい映画があったから、そのついでに誘われたのかと心配したけど、ちゃんとデートを意識してくれてたんだね」

私は頭を抱えた。負ける、この人には。

「オレも久しぶりに映画観た。こういうのも新鮮でいいね」

「はあ」

「綾瀬さんの顔、コロコロ変わって楽しかったし」

「はあ!？」

「映画の途中、たまに顔みてた……気づかなかった？ 集中してたもんね」

「はあ……」

やっぱり負けるわ、この人には。

episode 9 . 「雨宿りしませんか」

休みボケもようやく治った今日この頃。

梅雨に入っ**て**じめじめ、じとじと重苦しい**天**気が続いている。

「あゝ頭イタイ……」

低気圧に弱い私は、この時期になるとしょっちゅう頭痛に悩まされる。肩こりも酷いから、もしかしたらそれも原因かもしれないけど。

「綾瀬ちゃん、もう帰ったら？」

「うう、でも皆残業してるのに、ひとりだけ帰るのはちょっと気まずい……」

隣の席の水沢さんが「だよなー」と、同情するようにならずいた。エクセルシートの数字がチカチカしてきたころ、ようやくひとりふたりと席を立ち始めた。よし、私も帰るか……PCを落としながら、しばし目をつぶる。

「綾瀬さん、大丈夫か？」

目を開けると、主任の**高階**さん。

心配そうに私の顔をのぞきこんでいた。

「ちょっと頭痛が……でも大丈夫です」

「送ろうか？ オレもちょうど上がりなんだ」

え、どうしよう……。

隣をチラリと見やると、水沢さんがニヤニヤ笑っているのが見えた。

「ありがとうございます、でも水沢さんが一緒に帰ってくれることになってまして」

「……そうか、じゃあ水沢よろしくな」

水沢さんは「はい」と調子よく返事をしたものの、私にふり返ったその顔は『なにやってんのよ!』といった感じだった。

「なにやってんのよ!」

やっぱり。

「そういうと思った……」

「そういうと思った、じゃなくて! 綾瀬ちゃん、せっかく主任が声をかけてくれたのにもつたいない」

今度は私が『なにいつてんのよ!』って顔でふり返った。

駅のホームで電車を待ちながら、水沢さんは納得いかないって感じに頭をふる。

「主任、けっこうイケてると思うんだけどな。綾瀬ちゃんのタイプじゃない?」

「タイプじゃないっていうか」

「はつきりしないなあ。向こうは絶対気があるよ、だからホラ」
「だから、なに？」

何、つきあっちゃえって？

「それはー……」

たしかに主任は、ちょっとイケてる。

三十前半の独身。清潔感もあるし、顔もちよつと強面だけど悪くない。仕事できて、しかも皆に信頼されている上司だ。

「ために付き合ってみれば。どうせフリーなんでしょ」

「……」

「げっ、まさか。綾瀬ちゃん彼氏できた？」

河野さんは、彼氏なのか！？

「まだ、付き合ってるって言うほどじゃなくて」

「えー、どんな人！？ カッコイイ！？」

「……顔はカッコイイ」

「うわー、なになに、どんなタイプ？ 何してる人なの？ 仕事

は？ 年齢は？」

「……」

「ねー、教えてよー、私も彼氏のこと話してるんだしさ」

まずい。

なにがまずいって、私、河野さんのことあまり……というかほとんど知らないよ。

何をしている人なんだろう？ 仕事は？ 年齢すら、きいたこと

なかった。

「あー、それはね水沢さん、また日を改めてゆっくり話すよ……」
「あ、ゴメン、綾瀬ちゃん具合悪かったんだっけ。頭痛ひどくなる前に帰ったほうがいいね」

先に駅に降りた水沢さんと別れ、私はひとりドアの端っこにもたれて窓の外をながめた。雨がけっこう降っている……気になって鞆をさぐると、あんのじょう折りたたみ傘を忘れてしまったようだ。

もしかしたら駅に着くころには止むかも、という甘い考えは通用しなかった。

仕方ない、コンビニで傘買うか。

駅の構内にあるコンビニに入ると、なんとそこに河野さんがいた。

「あれっ、こんばんは」

「こんばんは、河野さん……お仕事帰りですか」

つい、聞いてしまった。

すると河野さんは「ええ」とうなずいた。なんの仕事だろう、今ここで聞くのは自然かな。不自然かな。いまさらかな。いまさらだろうなあ。

「帰りましようか」

気がついたら手を引かれ、河野さんと駅の外へ出ていた。

河野さんは大きな傘を持っていて、それに入れてもらうことになった。

「なんか顔色良くないですね、具合悪いんですか」

「頭が痛いのです」

「そっか」

少しの間、沈黙が落ちた。

「……本当は『雨宿りしていきませんか』って誘うつもりだったけど、今夜はお薬飲んでゆっくり寝てください」

「は？ はあ……」

「また今度、誘いますね」

雨宿りって、誘うって……どう解釈すれば!?

私の頭痛は、違った方向に酷くなっていった。

episode 10 . 「知り合いませんか」

お盆休み。

実家を早めに引き上げた私は、めいっぱいクーラー効かせたアパートの一室で、麦茶を片手にぼんやりと、見るともなしに壁をながめていた。

この壁の向こうが、お隣さんの部屋。

私はがっくりと頭を垂れると、すでに嫌気をさしていた飲みかけの麦茶のグラスをテーブルに押しやった。もう暑過ぎて、食欲もわかないし動く気もしない。隣に行くのすら、面倒くさい。

いや、面倒だから行かないのではない。

河野さんに会いたくないから行きたくない。いやいや、会いたくないのではなく、待ちたくない、といったほうが正しい。

河野さんは合鍵をくれた。

今日は私に部屋で『待つてて』欲しいのだそうだ。めったにこないメールにそう書かれていた。

あーあ、もしもあの姿で帰って来られたら、どんな顔をして出迎えたらいいのか分かんない。

今日、実家から戻る途中に寄ったデパートで、なんと河野さんを目撃した私。

その河野さんが、なんとスーツ姿だったので驚いた私。

しかも他にスーツ姿の女性と、男性と、また男性の四人でいたことに気づいた私。

そして、チキンにもその場をダッシュで逃げ出した私。

河野さんの、知らない顔を見てショックを受けている、今現在の私……。

あれはいつたいどういう組み合わせだったんだろう。仕事仲間？結婚式の帰りかな……いや、それにしちゃ女性が地味すぎるスーッだった。あれはどう考えても仕事モードだった。

すっごい洗練されていた。

カツコよかったなあ……セットした髪も、ストイックなスーツも、ピシッとしたネクタイも。ただ暑そうだった……皆無事だったのかな、あんな格好で。

ピンポーン

昼間はあまりメールをくれない河野さん。きっと仕事中的なだろう。つまり昼間に仕事してるんだな、そっか……たまに家にいるから、てつきり在宅でやれる職業なのかと思ってた。

ピンポーン、ピンポーン

やっぱり隣に行った方がいいかな。でもいきなりスーツ姿で現れたら、こっちだってびっくりしちゃうよ……それであれだ、あの質問だ。「なんの仕事してるんですか」だ。今さらだよ、ホント。

ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン……

ところでさっきから鳴っているインターフォンは、どう考えても河野さんのような気がする。このまま無視しているのもどうか。ま

ずいだろうなあ。

ガチャ、カタン

あ、入ってきた。

泥棒じゃないよなあ、あ、やっぱり河野さんだ。こんばんは、河野さん。

「……どうしたの」

セツトが少し崩れた前髪が、額にかかってカッコイイ。

河野さんのキリツとした目が、私をじっと見つめている。

「……こんばんは」

河野さんが私のすぐ横でひざまずいた。

冷たい、大きな手が私の額をそっと触れる。

「……熱があるね。熱射病かもしれない」

「道理でだるいと思った」

「メールもしたし、電話もしたよ。具合が悪いなら、遠慮なく連絡してよ」

「すみません」

やれやれ、と河野さんは指先でネクタイをぐっと緩めた。

あ、その仕草、反則ですよー。

「いいなあ」

「？なにが」

「それ、その仕草……も一回お願いします」

「は？」

腕を引っ張られ、有無を言わずベッドへと連れていかれる。
ドサリ、とあお向けに横たわると、河野さんの綺麗な顔が少しつ
らそうに眉を寄せた。

「無理させたくないんだ……」

「すみません、いろいろご迷惑おかけして」

「迷惑じゃないけど、ほんとしんどい、こづいづの」

「はあ、ホントなんとお詫びしたらいいのか……」

「お詫びとか、そうじゃなくて」

むぎゅ、と手で口をふさがれる。苦しくないけど、なんなのいっ
たい？

河野さんは切ないため息をついた。

「キスしたらとまらなくなるから、やっぱ止めとく」

「むぐっ」

「君、本当に僕と付き合っている自覚ある？」

それにはあまり自信なくて、つい反応が遅れてしまったのがいけ
なかつた。

「あるよね……？」

河野さん、顔がこわいです……！

無理矢理はがした手を、両手でぎゅっとにぎってみる。

この手から伝わるだろうか、私の気持ち。

「ないんです、実感が」
「はあ!？」

どうやら河野さんの想定外の返事をしてしまったらしい私。

「河野さんって何者ですか」

「……………」

「あの、お隣さんだつてことは分かってるんですが……………たとえばなにやってる人なのかなあ、とか……………」

だんだん声が元気を失い、語尾が小さくなってしまふ。

それに反比例して河野さんの表情が、一転して明るく生き生きしてきた。

「やっとオレに興味持ってくれたんだ」

「あー、その……………」

「よかった、もうぜんぜん脈ないのかと思って落ち込みかけてた」

つかんだ両手を引き寄せられ、やわらかいものを押しつけられた。
むちゅ、つて。

きゃああ、くちびるだ!

「もっとお互い、深く知り合おうよ……………ね?」

その夜、私はお隣さんに食われた。

episode 11. 「大丈夫でしたか」

「乾杯」

コチン、と鈍い音なのは、向こうがビールのグラスなのに私は湯飲み茶わんだから。

スイーツ、とキレイに気持ち良くグラスを半分空けた河野さん。水みたいに飲むなあ。

「いいお店ですね」

「きつと気に入ってくれと思った。綾瀬さんの好みはだんだん分かってきたからね」

……そんな分かりやすいですか、私。

「創作料理って、いつもなに頼めばいいのやら……オススメお店の人にきいてみてもいいですか」

「どうぞ」

お洒落なモダン和風の内装は、スタイリッシュなのに変に肩肘張らないですみそそうな雰囲気だ。『久しぶりに外で食べない？』ってメール受け取ったときは迷ったけど、やっぱり来てよかった。

河野さんも仕事帰りらしい。スイーツじゃないけど、いつもと違う格好。待ち合わせで見かけた時、知らないひとみたいでドキリとした。慣れてないんだ、このひとのこんな姿に。

「綾瀬さん、本当に飲まなくていいの？」

「いいんです」

明日は週末だけど、お酒だけはきっちり断った。
なぜって？ だって前科があるからさ！

酔っ払って醜態みせて、あんな迷惑もうかけるわけにはいかない。
だいたい私はお酒飲めるけど、特に好きなわけでもなかったんだ。
私よ、なぜあんなに飲んだ？

今後は飲み会のときは、乾杯だけつき合おうようにしよう。

「もしかして酔っつの心配してる？ 今日はおれもいるし、ちゃんと
家まで連れ帰ってあげるから平気だよ？」

「いえいえいえ、だめですそんな甘えは良くないです」

「えー、でもおれは綾瀬さんアテにしてるんだけどな」

私をアテにしてる？

「おれが酔ったら、綾瀬さんに連れ帰ってもらおうと思ってるの」
「あー、それなら大丈夫です。ちゃんと責任持って連れ帰りますよ、
だから河野さんは安心してたくさん飲んでください」

そうしたら、このひと本当にたくさん飲んだ。

もーびっくりするくらい……飲み方自体はスマートなんだけど、
量はぜんぜんスマートじゃない……。

私がデザートのわらびもちアイスクリームつくるところには、河野
さんすっかりできあがっていた。

言動はいつも通りっぽいんだけど、顔がけっこう赤いのだ……こ
れはタクシー呼ぶべきだろうか？

「あのう、お店のひとにタクシー呼んでもらいましょうか」
「ダメ、今乗り物なんか乗ったら吐く」

吐く！？

「た、た、大変……大丈夫ですか？」
「んー」

河野さんはテーブルにひじをつき、片手で乱暴に髪をかきあげた……うわっ、なんだこの色気。やばい、送りオオカミになりそうだ私が。危険、私、危険！

「あのう……」
「とにかく外でよっか」

そうして外に出た。

隣の河野さんは、ちょっとぶらついてる気もするけど、わりとしっかり歩いてる。これなら電車乗れるかな……って思ってたのに、河野さんいきなりガードレールに寄りかかった。

「うーん、やっぱり目まいがするな……」
「あわわ、大丈夫ですか！？ どこかで休みましょうか！？」
「うん、そうしよう」

がしっ、と手を取られ、気がついたら近くの大きなホテルに入ってた……いや、ラブホテルじゃないよ！？ 普通の、ごく一般のホテルだよ！ ちょっとだけお高そうな……まさかここで休むつもり！？

「あ、あ、あの、どっか近くのカフェとかは」

「んーん、少し横になりたい。悪いけど綾瀬さん、つき合って」
「は、はあ……」

で、気がついたら、フツのホテルの部屋にいた。
念を押しておくけど、本当にフツだから！ しかもツインだよ
!?

河野さんがベッドにうつぶせに倒れ込んだ。

あーあ、どうしようこのひと……こんな悪酔いする性質だったと
は。こんなことになるなら、頃合い見て全力で止めるべきだった。

「綾瀬さん」

「は、はいっ」

「暑い」

ゴロリ、と河野さんが体を反転させ、おお向けになった。

片足立てて、しどけなくベッドに横たわる河野さん……こわい、
色んな意味で。

「暑い」

「あ、はい、冷房入れますか？」

「シャツ、脱がせて」

「はいいい!？」

「早く」

「は、はいっ!」

失礼します、すみません……と、誰にあやまってるんだか私は心
の中で謝罪をくりかえしつつベッドに這いあがると、意を決して河

野さんのシャツの襟元をグイッとつかんだ。

プチ、プチ、プチ……（ボタンをはずす音）

は、肌けたー！

だめだ、鼻血出そうだ……って待てよ。

ベッドで馬乗りして、シャツ脱がせてるよ私。

これじゃまるで私が河野さん襲ってるみたいじゃないの！

「す、すいませんっ！ もう私帰ります、本当に失礼しましたっ」

我に返った？私は、ベッドから飛び降りるとペコペコあやまった。河野さんは半身を起こし、あっけに取られた様子で私を見る。うう、視線が痛い……ごめんなさい、かなり邪な妄想が脳内に走りましたすいません。

「……綾瀬さん」

「はいっ」

「こっちきて」

「いえ、その」

「いいから」

押し切られてしぶしぶベッドサイドにやってきた私を、河野さんは面白そうに見上げた。

「失敗しちゃった」

「はあ、もうお酒はほどほどに……」

「じゃなくて、せっかくうまいこと綾瀬さんをホテルに連れ込めたのに……ちょっと調子に乗っちゃった」

「……は？」

河野さんはガバツと起き上がると、立てた膝にもたれるようにして体を丸め、クスクスと笑いだした。ねえ、ちよつと待って……これってまさか。

「演技でしたかー！？」

「はい」

「はい、じゃないでしょー！？ なにやってんですかあなたは」

ゴロリ、と再び横になった河野さんは、大きく息を吐いた。

「嫌だった？」

「なにが」

「オレと寝たこと」

ぎよっ、として逃げ腰になる私。

「あれから全然、触れさせてもらえないんだけど……」

「はあその」

「タイミング、わざと外してない？」

外してました……確かに。

「良くなかった？」

「あ、いやその、いえいえいえそんな」

「となると、アパートのせいかな……壁わりと薄いから、気になるのかと思ってホテルへ連れ込んでみたけれど……やっぱりその気になれない？」

いやその、うん、その……。

「そういうことはですね、口に出して言うものじゃないですよ」

「そう?」

「そうですね……空気読んでくださいよ」

「言葉は必要ない?」

ドキリとした。

「本当はオレの言葉が足りなくて、不安だったんじゃないの?」

「……」

「オレは君が好き。すごく好き」

だめだ、こんなに言われたら……私の拒否権どこ行った? って感じ。

「オレの隣においで……」

ベッドに隣同士、横に並んで寝転がった。

当然それだけで済むはずもなく……。

episode 12 . 「迎えに行きましょうか」

「休日出勤？」

「はい、明日の土曜日だけなんですけど」

夕食後の後片付けをしながら、シンクの隣でお皿拭きの布巾を手にした河野さんが首を傾げた。

「さいきん仕事、忙しいの」

「いいえ、全然。ヒマでもないですが……たまたまなんです。休日出勤って滅多にしたことないし」

いちおう週末の予定を教え合うくらい、私たちの仲は親密になっていた。

河野さんは家で仕事することもあれば外で仕事することもありますが、でも土日はたいていお休みか自宅で仕事するかのどちらかだ。

だから毎週土日はどちらかの部屋でまったり過ごす。
たまに出かけることもあるけど、あまり遠くへは行かない。

「綾瀬さんだけ？」

「主任も付き合ってくれますので、一人じゃないです」

河野さんは「ふうん」とぼんやりした相づちをつくと、二人分のコーヒーカップを戸棚から取り出した。ほうじ茶を入れてくれるつもりらしい。本当はコーヒー党らしいけど、私が夜コーヒー飲むと眠れなくなるからカフェインレスにつき合ってくれるのだ。

「じゃあ今夜は早く寝て、明日無理しないようにね」

親みたいなセリフに、私の心がなごんだ。

土曜日の仕事は、けっきょく夜七時までかかってしまった。
本当は夕方に終わらせるつもりだったのに。

「おつかれさま」

高階主任たかしなが缶コーヒーをおごってくれた。
微糖だった。中途半端に苦いなあ……。

「この後なにか軽く食べていくか」

「は……」

「嫌いなものあるか？」

中途半端に苦いコーヒーとか嫌いです……なーんちゃって。

「ま、あと三十分ぐらいであがれるだろう」

「はあ……」

そのとき鞆の中の携帯が震えた。
マナーの着信……フラップを開くとメール一件。

『何時に終わりますか？』

河野さんからだ。

『あと三十分ぐらいであがれそうです』
『じゃあ会社まで迎えに行きましょつか』

迎えに？ 会社まで？？

「綾瀬さん、そろそろそっち終わりそう？」

「……」

「綾瀬さん？ どうした」

はつとして隣を見ると、主任がのぞきこんでいた。

「少し疲れてないか」

「そうかもしれない……」

「悪かったな、休日なのに」

「いえいえ」

一緒にエレベーター乗って、一階まで降りて、正面入り口出たところ……スラリと人目につく立ち姿があった。河野さんだ。

「……本当に、会社まで来てくれたんですね」

少し首をすくめてクスツと笑う河野さんは、よく見なくてもいつもと違う雰囲気だ。

なんていうか、お出かけな感じの服装してる。

「ええと、徒歩ですか？」

「バイクは置いてきた。紗枝もその格好じゃバイクだとキツイだろ」

私は今度こそ目を丸くして固まった。

今、私のことなんて呼びました？

「さ、行くところか……じゃあ、失礼します」

河野さんは私の手を取ると、隣の主任にニッコリ・サラリと挨拶をする程度に礼儀正しかった。

私と言えば、はじめてつないだ手に（そう、はじめてだったのだ！）うれし恥ずかし、さらに主任の前で気まずさマックスで挨拶もそこそこだった。

「じ、河野さ……」

「涼」

隣をふりあおぐと、ひっそり短く微笑を浮かべる河野さん。

「そろそろ名前で呼ぶのもいいかもね」

キュツ、と強く手をにぎられ、そのしぐさがなんと……胸を射ぬいた。

どうしよう、きいてみたいことがたくさんある。

主任のこと、嫉妬したんですか。

私のこと、名前で呼びたいんですか。

私、あなたの特別なんですか。

「私……あなたが特別なんだ」

私のひとりごとのようなつぶやきが、次の瞬間に河野さん……もとい、涼一さんの体を反転させ、私を抱きしめさせ、そしてクスクスうれしそうな笑い声を立てさせた。

「俺も……よかった、ちゃんとわかってたんだ」

「なにそれ」

「伝わってるか、いつも心配」

「こっちもいつも心配ですって。」

episode 13・「ひどい人」

一度、口を閉ざしてしまつたと次なかなか言えない。
そんなことを痛感する。

涼一さんの部屋で見つけた不動産雑誌。
いくつかの物件に丸がついていた。

引つ越しちゃうの、涼一さん……？

もしかして一緒に暮らそうって、そういう意味だろうか。
でもそんなこと怖くて聞けない……私は『隣』の位置しか許され
てない気がするから。

私の言う『隣』は、お隣さん。

つまり近所の人よりちよっぴり近い、隣の部屋の人。

たとえば付き合つても、彼女になつても、恋人と呼ばれても……
一緒に暮らすとは限らない。

そもそも始まりがお隣さんだったから、わざわざ縮める必要が
ない距離なのだ。だから私たちはお互いの部屋に泊まりに行ったこと
がない。夕食後、ぞんぶんくつろいでも終電心配する必要がないし、
会いたくなればすぐ隣へ会いに行けるのだから。

これ以上、近づかなくても不便しない距離……そこが定位置にな
ってしまった。

いつもの夕食時、私は渾身の力作（つまり上達した）カツオのフ

ライを前に、箸を上げたり下ろしたりしていた。

「食欲無いの？」

「あ……ううん。ちょっとぼーっとしてた」

涼一さんは味噌汁のお椀を片手に「ならいいけど」と軽くスルー。いや別に、気にして欲しいとか思わないけど……けっこうあっさりしてるよな、こっぴうところ。もっと気にしてくれないのかな。

うざい思考。

私が彼氏だったらうざいと思いきやそんな考え方。面倒な彼女、そんなものになりたくない。

「ほうじ茶飲む？」

「うん」

テーブルを立ってお皿を片づけ始めた姿に、私も立ちあがってキッチンへ向かう。私がお皿を洗い始めれば自然に隣でお皿を拭きだす涼一さん。さらっと自然に、気がつけばそうしてた。そこにとまどいも迷いも感じられない。

こんな小さな、なにげない行動が……私にあることを気づかせる。そしてそれは間違いないと思う。

涼一さんは、昔だれかと一緒に暮らしていた経験がある。

その誰かはきっと女の人だ。

同棲していたのだろう。役割分担を理解し、自然にこなしている……片方がお皿を洗えば、もう片方がお皿を拭くという具合に。

「紗枝？」

私は目を閉じると、首をぐるりとまわした。

「なんか肩こっちゃった。今日は早く寝た方がいいかもなー」

私はいそいで洗いあげると、エプロンを外して腕にかけた。

「じゃ、戻るね」

「ああ、お休み」

玄関出て、扉を閉じる。

外気はすっかり冷たくて、もう冬なんだなと実感した。

そっか、一年経つんだ……。

クリスマスは来月だ。

あれから一年経つけれど、今も私はお隣さんで……同じ距離を保つてる気がしてしまう。

戻った部屋はひんやりしていて、でも去年からちっとも変化が無い。

だって私は去年と同じ一人暮らしで、お隣さんも同じ人だ。

でも、それももう終わりの気がしてきた。

涼一さんは、きつとどこかへ引っ越してしまうだろう。

そうしたら私の隣はぽっかりと空く。

ベッドに入ったら、なんだか泣けてきた。

変化が無いのがこわいなんで、想像できなかった……涙にくれて浅い眠りをさまよってたら、体が温かいなにかに包まれた。

「紗枝……まだ眠ってないよね」

断言ですか、そこ。

「君、今夜少し変だったよ。なにがあったの」

「……」

「今夜と言わず、最近と言ったらいいのかな……とにかくいつもと違う」

いつもと違うって、じゃあいつもの私ってどんななの。

「困ったな……いい加減、なにか言ってよ。僕も我慢の限界だ」

「あおう」

私は薄眼を開けると、涼一さんの前髪からのぞく瞳を見上げた。

あ、スイッチ入ってる。

「だーめ、そうやって腕をまわしてごまかしちゃ」

「……」

「抱くのは簡単だけど、そうしたらちゃんと話ができないよ」

私は涼一さんの首から腕を外した。

シーツに横顔を押しつけ、力の抜けた手のひらを眺めた。

「……引越すんですか」

「え？」

「どこか遠くへ、引っ越すんですか」

涼一さんの体が少しゆれた。

「うん……駄目かな？」

駄目かな、ってそんな、そんなの涼一さんの自由でしょ。
そんな言葉を飲みこんだら。

「紗枝の会社は近くなるよ」

「……え」

「待てよ、もしかして……」

ぐきつ、と首が鳴るような勢いで、顔を正面からとらえられた。
真剣な、どこか怒っているような顔。

「僕が一人で引っ越すかと思ってたんだ？」

「……あ……」

「ひどい人だ」

涼一さんの眉がひそめられ、それから狂おしくキスされた。
息ができない、つまる……吐息が飲みこまれる……苦しい、苦し
い。

ホント苦しい、溺れそうだ。

episode 14 . 「聞いてくれませんか」

嵐がやってきたのは平日の夜だった。

涼一さんの部屋で夕食をすませ、入れたてのほうじ茶を手に、二人並んでまったりソファでくつろいでいた時のこと。

「あ、誰か来た……」

「そうだね」

しぶしぶ、といった感じで立ちあがる涼一さん。

食後はとにかくダラダラするのが好きらしく、食べてすぐシンクの洗い物をすませると、そこからなんにもやらない。やるうとしない。あ、お茶はいれてくれるか。でもあとは本当にだらしがなくつろいで動こうとしない。

女の人の声？

そおつと玄関につづく廊下に顔を出すと、お客さんとバッチリ目が合ってしまった。

「「あ……」」

ハモった。

ああ、なるほど……と、これまた二人同時にお互いを理解する。

「涼一、二人だけで話せない？」

あ、呼び捨てだ。やっぱりね。

私をチラリと見て、気まずそうにしている。私も相当気まずいですが。

涼一さんが振りかえり、私の姿を確認すると、とんでもないことを言い出した。

「紗枝も一緒にいてもらう」

「あたしは構わないけど、その人、涼一の今カノなんですよ？ いいの？」

「いい。むしろ今ひとりしておくのと勝手に悪い想像しちゃうから」

勝手に悪い想像するって、私が？

もうストーリーはとっくに出来上がってますけど。

ほうじ茶をいれなおし、あらためて三人で食卓のテーブルに着いた。

面子は涼一さん、涼一さんの元カノ、涼一さんの今カノ（私だ）という組み合わせだ。異常、じゃなくて非常事態だこれは。

「……紗枝」

「はいっ…！」

うわっ、必要以上に声大きかったか。

涼一さんは少しの間をおいて、それからテーブルに乗ってる私の手をさりげなく包んだ。

「こちらは井上理恵子さん。俺の元カノ。去年の秋までの二年間、同棲していた」

はいいっ!?

二年間は長い……さらつと爆弾発言してくれるな……いたたた。

「ええと、紗枝さん、でよかったかな」

「はあ……」

井上さんはおそろおそろの切り出す。

「その、この人すつごく無神経なところあるけど、今の情報はあまりに気にしないでね。もう終わったことだから」

「はあ……」

終わったことですか……二年が。さらりと二年……いたた。

「それに私、来年結婚するの。その報告に来たのと、それから……」

そこで井上さんは言葉を切ると、傍らの涼一さんをチラリと見上げた。(そう、井上さんは小柄な女性である。涼一さんの背が高いのもあるけど)

「涼一にあやまりたくって……ゴメン、あの時なにも言わずに出てっっちゃって」

「いいよ、もう」

「本当にごめんなさい。あの後、何度もメールくれたよね……返信しよつと思いながら、ずつとできなかつた」

涼一さんは少し投げやりに「いいよ、もう」と繰り返すと、背もたれに体を預ける。でも私の手はぎゅっと握ったまま離そうとしない。どうして……。

「紗枝……逃げるなよ」

どうして私が逃げようとしてるって分かったんだろう、この人。

二年間も一緒に暮らしていたのに、別れることになるなんて。きつと結婚だって考えたに違いないのに……なんで別れるなんて選択肢が二人の間に残っていたんだろう。

私なんて、涼一さんと付き合って、いや出会ってまだ一年……やっとなだ。

ちゃんと付き合い始めたのは今年のGWくらいからだし、あまりにも短い。

少しの沈黙の後、井上さんはゆっくりと切り出した。

「まあ、そういうことなの。許してくれなくてもいいよ。ただ結婚する前に、きちんと涼一と話したかったんだ」

「そっか」

「じゃあ、あたしはこれで失礼するよ」

あっさりと井上さんは立ち上がり、私に向かって微笑んだ。

えくぼの可愛い、キュートな人だ。

井上さんを見送って玄関に立ったまま、私は取り残された気持ちになる。

彼女は、軽やかなステップで先へと進んでしまった……私はひとり、ここから動けない。

「何を考えてるの」

遠くから涼一さんの声が聞こえた。

「紗枝、さーえー」

「なんで……二年も一緒だったのに」

体にまきつく、甘い鎖。

がらんじめにされて、私はきつと抜け出せない。それが怖い。

「なんでって言われても……終わってしまったからとしか言いようがない」

「なんで終わって……どうして……」

私たちも、いつか終わってしまったらどうしよう。

episode 15 . 「お隣さんでいてください」

廊下に取り残された私……と、涼一さん。

涼一さんの長い腕が鎖のように甘く私に巻きついた。

「君とは終わらせないよ」

そんな宣言、無意味じゃないですか。

同じ言葉、いつかあの人にも言ったんじゃないですか？

「悪いけど逃がさない……今さら逃げたらひどいからね」

「……脅しですか」

「ちがうよ。君にすがってるんだ……俺を置いてかないでって」

なにその似合わないセリフ。

振りかえると涼一さんの真剣な瞳にぶつかつた。

「終わらないように、協力してよ」

「協力……」

「むずかしいことも『おすそわけ』すればお互い半分こになるしね」

二人で顔を見合わせ、それから同時に吹き出した。

その笑いは先刻まで二人の間に流れていた微妙な空気を一掃する。

「そういえば去年のクリスマスだったね、初めて紗枝におすそわけしてもらったのは」

そう、私がホールのケーキひとりでもてあまして、お隣さんの涼一さんに『おすそわけ』したのが始まりだった。

「クリスマスケーキ、今年も一緒に食べようね」

「……はい」

「来年も」

「……」

「さ来年も、その次の年も、そのまた次の年も、そのまた」

「わ、わかった、もうそのぐらいでいいですってば！」

隣で微笑む涼一さんの瞳がやさしくにじむ。

今年のクリスマスは土日なので、私たち二人とも仕事が無い。めずらしく出かけることになり、私は行き先を教えてもらって面食らった。

「教会ですか」

「そう、聖夜の教会で静かなひとときを過ごそうよ」

「ミサとかあるんですか」

「もちろん。キャンドルサービスもね」

涼一さんはクリスチャンだそうだが、滅多に教会へ足を運ばないらしい。

「親がそうだから幼児洗礼を受けたんだ。でも実際うちの両親もあんまり熱心じゃないな」

「うちは仏教っぽいけど、やっぱり熱心じゃないです」

そんな不真面目なクリスチャンと、いちおう異教徒の人間が、クリスマスに手を取り合って教会へ行くのだ。神も仏もきつとあきれているだろう。

隣町の教会に到着すると、ちょうど夕方のミサが終わったところだった。

夜のミサに向けて、なにやら準備をしているようだ。

ステンドグラスの窓がきれいだった。

教会へ来たことなんて数えるほどだけど、なるほどちょっと敵かで素敵な空間だ。

「紗枝、こっちへおいで」

口を開けてぼんやり窓ガラスばかり見ていたら、祭壇の前の涼一さんに呼ばれた。

「こっち、隣に」

隣に立つと、涼一さんは咳払いをひとつ。

「さて、と……これからのことだけど」

「はい」

「ずっと俺の『お隣さん』でいて欲しい」

「はい？」

手を取られた。

「これ、うちの合鍵」

その鍵は、丸くて輪っかの形をしていて……だめだ。

「紗枝、泣いてるの」

鍵は涼一さんの手によって指に収められ、そのままぎゅっと握りしめられた。あったかい手。なんだろうこのベタな展開。教会へ向かっている時点で気付けなかった私がどうかしている、くらいな。

「……なにか言っつてよ、紗枝」

「……」

「『はい』とか『うん』とか『うれしい』とか、なんでもいいから。じゃないと落ち着かない」

なんでもって、でも、すべて肯定の言葉なんですネ。

「……あい……」

しまった、つい噛んで？しまった。

「愛、ね……俺も愛しているよ」

「……！」

「愛してる」

「ここに誓おうじゃないか。

これからと共に愛し合い、分かち合うことを。

苦しみも悲しみも。

よろこびもしあわせも。

いつもあなたの隣で。

（おわり）

episode 15 . 「お隣さんでいてください」 (後書き)

長い間おつきあいくださり本当にありがとうございます！

多くの皆さまに読んでいただき、うれしい気持ちでいっぱいです

皆さまからいただいた感想はとても励みになりました。あらためてお礼の言葉を言わせてください……ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2645t/>

お隣さん

2011年12月17日00時52分発行